令和5年度　南部地区子ども支援net　　議事録

日　時： 令和6年1月12日（金）　13：30　～　16：00

場　所： 瀬戸内町きゅら島交流館

参加者： 54名（※詳細は別紙）

1. 開会あいさつ

瀬戸内町保健福祉課

課長　　信島 浩司 氏

2. 自己紹介

3. 資料説明及び事業報告

奄美地区地域自立支援協議会（子ども部会、子ども支援net）について

4. ミニ研修

「保護者との連携について～保護者に何をどのように伝えるか～」

鹿児島大大学院臨床心理研究科　准教授　**高橋 佳代** 氏

5. グループワーク

「奄美南部での困り感のある子どもやその家族を支える人たちの連携について」

1グループ【のぞみ園、ReAL、高丘保育所、潤生会保育園、加計呂麻園、古仁屋小】

・早い段階での支援へのつなぎについて話し合った。
・保育士が困り感に気づいても支援機関などと連携するまでが難しい。
・健診等で親子教室の利用に向けてアプローチをするがなかなか繋がらない現状がある。
⇒地域性の問題もあり、療育を利用することへの誤った認識があるように思う。
・発達検査を保育所の行事として保健師、療育施設も支援者も含めて実施することで、保育所職員や保護者の気づきにもなり、一緒に話し合うことで共通認識も持ちやすいのではないかという意見が出された。
・顔の見えるネットワークを作っていくことが大切だと改めて感じた。

2グループ【にこぴあ、ReAL、高丘保育所、つなぐ、古仁屋小、ひさの助産院】

・地域の特性の共有し、どのような対応を行っていけばよいか話し合った。
・人手不足などの課題があり、地域資源が限られている中で、他の地域の機関とも協力して課題解決に向けて取り組んでいくことが必要だという意見がだされた。
・地域の各機関も地域独自の話し合いの場（療育協議会等）を活用して繋がっていくことも大切。
・市町村を超えて一緒に協議できる、このような場（支援ネット）があるのはよい。

3グループ【ここ、あんだんて、住用中、奄美病院、瀬戸内町教委、瀬戸内町】

・保護者との連携に関する困り感について協議した。
⇒時間がない中でも、今困っている時に話す時間を取ることが大切だという意見が出された。
・不登校と発達の問題が絡んでいるような事例について関係機関との連携と、少しの時間でも訪問などを行い、関係を続けていく事が必要だという意見が出された。
⇒短い時間でも、会うことで、困った時に相談できる人がいるという状況を作っておくことになり、相談しやすくなる。

4グループ【ここ、かな保育園、古仁屋小、いもーれ奄美、奄美病院、大和村】

・地域の保育所での取り組み状況について共有
⇒保育所の配置基準はあるが、出来るだけ個別対応できるように関わっている。
⇒専門職の方に定期的に保育園に来ていただき、手厚い保育ができるような活動もしている。
・特性のある子は、早い段階での支援への繋ぎが大切だと思うが、保護者が拒否してしまうことも多く、ハードルが高いと感じている。
・困り感の有無にかかわらず、親子で参加するような場に支援者が出向いていき、気楽に相談できるような雰囲気つくりが必要。

5グループ【三環舎、にこぴあ、かな保育所、高丘保育所、しゃきょう、宇検村】

・地域の現状として、支援を受けるために移動しなければならない現状がある。（支援学校など）
・サポートできる専門性のある方が地域に来てくれるような仕組みがあればよい。（支援学校の分校など）
・保護者に特性があり、支援が必要な場合、子どもの特性を伝えることが難しさを感じることも多い。
⇒同じ相談支援専門員が関わるなど、情報共有がしやすいような工夫をしていたりする。
・保育士から支援の必要性について伝えにくい時に、機関同士で情報を共有し、保健師などの専門職から保護者に機会を見て伝えるようにしていただくようにするのもよい。

6グループ【ここ、阿木名保育所、古仁屋小、大島特別支援学校、、瀬戸内町】

・早い段階での支援へのつなぎについて意見交換した。
・診断名がつかない子どもが支援を受ける時にどのように進めていけばよいかとの質問も出された。
・5歳児健診がない地域もある。就学相談会で、支援学級の方向性がでても、祖父母世代が理解がなく、受け入れられないこともある。
・特別支援学校の対象となっても、希望の星学園に入所するか、通学するとしても送迎バスが近くまで来ていないな

ど、地理的な問題がある。
・地域としては学校の支援員の数は確保しているが、支援員の専門性向上に向けた取り組みも必要。
・通級指導についても、奄美市まで通っている子どもいるため、地域でそのような支援が受けられたら良い。
・資源の不足と予算の確保が必要。

7グループ【愛かな、ここ、ひかり幼稚園、潤生会保育園、しゃきょう、大和村】

・3歳児男児、常に走り回っている児童の事例について家庭との認識のづれについて共有
・保育所と行政が一緒に話し合える場つくり（支援に繋がるのでは）
・定例会の実施、
・療育のハードルを下げ受け入れやすくするために、地域住民に向けた発達障害に関する研修が必要。
・過程を取り巻く機関の連携が必要。

8グループ【のぞみ園、ここ、田検保育所、訪看イルカ、大島支庁瀬戸内事務所福祉課、宇検村、瀬戸内町】

・保護者への伝え方
・事例を通して保護者自身が生きづらさがある場合、保護者をさえることで、子どもの成長にもつながる。
⇒保護者に寄り添い、保護者と信頼関係を作っていくことが大切。
・地域資源がない中で、少人数での保育などを活用し、上手く療育的な関りや工夫ができていけばよい。
・焦らずに保護者の気持ちを受け止めて、子待った時にすぐに手を差し伸べられる体制つくりができたら良い。